

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 元 年 5 月 21 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02539

研究課題名(和文) フランスにおけるケルト学の成立とその背景 - 中世文学の復興という観点から

研究課題名(英文) The Establishment of Celtic Studies in France and Its Background - From the Viewpoint of the Reconstruction of Medieval Literature

研究代表者

梁川 英俊 (YANAGAWA, HIDETOSHI)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：20210289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀のフランスにおけるケルト学の成立に関して、それが同時代の中世文学の復興の風潮と密接な関連性があることを、ヨーロッパで最初のケルト学の国際雑誌『ルヴュ・セルティック』に焦点を当てて明らかにした。また、このようなケルト学の進展は、言語学のみならず、当時のフランスで盛んに議論された人種論に少なからぬ影響を受けていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在のケルト学は英米圏が中心であり、フランスにおいては一般に「外国の」学問とされ、「傍流」の扱いを受けている。しかし、ヨーロッパ最初のケルト学の国際雑誌がフランスで創刊されたことから分かるように、19世紀のフランスではケルトは盛んな議論の対象となった。本研究は、このような動きが当時の中世文学の復興と関連しているばかりではなく、同時代の人類学におけるケルト人種論の影響を大きく受けていることを示した。

研究成果の概要(英文)：By focusing on the publication of the first international journal of Celtic studies, the "Revue celtique", we clarified in this research that the establishment of Celtic studies in France in the 19th century was closely related to the contemporary trend of the reconstruction of medieval literature. In addition, we showed that not only the linguistics but also the racial theory actively discussed in France in the same century had much influence on this progress in Celtic studies..

研究分野：ケルト学

キーワード：ケルト フランス 中世文学 アンリ・ゲドス 人種論 ポール・ブロカ エルネスト・ルナン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

報告者は1990年代よりフランス・ブルターニュ地方における地域的アイデンティティの起源に関する研究を進め、文献調査や現地でのフィールドワークにより、主に以下の4点にわたって研究成果を発表してきた。

(1)19世紀のブルターニュ出身の文献学者ラ・ヴィルマルケが1839年に出版した歌集『バルザス＝ブレイス』が、ブルターニュの地域的アイデンティティの形成において果たした役割に関する研究

(2)ラ・ヴィルマルケが民俗学者リュゼルの論争を中心に、ブルターニュのアイデンティティ形成が当初から孕んでいた複数性の問題を民謡収集というテーマから明らかにする研究。

(3)上記の研究によって明らかになったブルターニュの地域的アイデンティティの形成過程を、わが国における類似の事例と比較・検討する研究

(4)特に鹿児島奄美大島のシマウタ(島唄)やシマグチ(島口)の保存・継承を中心として、同地域の地域活性化の可能性を考察する研究

以上のような成果を踏まえ、平成25年～27年度の科研費基盤研究(C)「19世紀フランスの文化事象としてのブルターニュの民謡収集」において、ブルターニュの民謡収集をフランスおよびヨーロッパ全体の歴史的・文化的・思想的動向の中で再検討したが、その過程で見えてきたのは、18世紀に始まる中世文学の再発見がフランスの文化全般にもたらした影響の予想を超える大きさだった。同研究の主要テーマであった19世紀に国家主導で行われた民謡調査は、実行委員会のメンバーの大半が中世文学者であったという事実が示すように、その調査自体が中世文学研究の一環として理解されるべきものであり、ラ・ヴィルマルケの業績やブルターニュにおける地域主義の発生も、同時代の中世文学に関する議論に照らして初めてその必然性が明らかになる性質のものだったのである。本研究は、この「中世文学の復興」という観点から、フランスにおけるケルト学の成立を再検討することを目指す。

2. 研究の目的

フランスにおける学術研究としてケルト学は、1870年にアンリ・ゲドスによって創刊された『ルヴュ・セルティック』によって始まる。この雑誌が目指したのは、フランスのみならずヨーロッパ全域のケルト学者による国際的なネットワークの構築であったが、これは当時としてはきわめて革新的な試みであった。フランスのケルト学はそれを境に、1876年には高等研究実習院においてケルト文献学講座が開設され、1881年にはコレージュ・ド・フランスにケルト学講座が開設されるなど制度的にも急速に整備されていく。では、なぜフランスで他のヨーロッパ諸国に先駆けてこのような動きがいち早く形成され得たのか。本研究は、その理由の一端が18世紀に始まる中世文学の復興にあると考え、主に以下の3点について調査を行う。

(a)18～19世紀におけるフランスの中世文学の復興を具体的に検討し、その受容と社会的影響の実態を明らかにする。

(b)「円卓物語」の起源に関する議論を整理し、フランスにおける島嶼ケルト諸語地域への関心の高まりとその背景を明らかにする。

(c)ヨーロッパ初のケルト学の国際的学術雑誌『ルヴュ・セルティック』の創刊までの過程とその学問的傾向を分析・整理し、この雑誌の野心と歴史的意義を明らかにする。

(a)に関しては、18～19世紀における中世文学の再発見について、ラキユルヌ・ド・サント＝パレーの著作や、雑誌『ビブリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』に発表された諸作品、さらに19世紀前半に流行したクルゼ・ド・レセの『韻文版・円卓』を中心に、この時代に中世文学がどのように受容され、いかなる広がりや社会的影響力をもったのかを、いわゆる「トルバドゥール様式」等の大衆的な流行も視野に入れながら検証する。

(b)については、「大革命以後」に起きた「フランス語とフランス文学の起源」をめぐる論争から、特に「円卓物語」の起源に関する議論に注目し、当時有力であった「南」(＝プロヴァンス)と「北」(＝ケルト)の二つの起源説の間の論争の詳細とその帰結について検討する。また、北方起源説において重視されたウェールズの事例について、それがいかなる文献に依拠して紹介されたのかも併せて明らかにする。

(c)に関しては、まず初期のケルト学の研究について、それが中世文学研究という側面から見ていかなる革新をもたらしたのかという点を検証してみたい。そのうえで、『ルヴュ・セルティック』において活躍した創刊者アンリ・ゲドスをはじめ、アンリ・ダルヴォア・ド・ジュバンヴィル、ジョゼフ・ロートらの中心メンバーの問題意識や方法論等に注目し、彼らがケルト学を通して何を目指そうとしていたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は3年の研究期間において、主として以下のような方法で研究を進める。

(i)日本における関連文献の調査・収集および読解

(ii)海外の図書館等における関連資料の調査・収集および読解

初年度は、まず18世紀のフランスにおける中世文学の復興の先駆けとなったラキユルヌ・ド・サント＝パレーの著作を、『古代騎士道覚書』(1753年)や『トルバドゥールの文学史』(1774年)を中心に検討し、加えてボルミー侯が1775年にサント＝パレーやトレサン伯と共に創刊した『ビブリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』に掲載されたマ

ロリーやクレチャン・ド・トロワらのテキストのリライト、またルグラン・ド・スィーが刊行した『ファブリオーあるいはコント』(1779年)等の内容も含めて検討する。続けて、19世紀に入って大衆的な流行を収めたとされるクルゼ・ド・レセの『韻文版・円卓』(1811年)や、マルシャンジエの『詩的ガリア』(1813年)等の作品について読解を進め、並行してこうした作品を生む潮流と当時流行した「トルバドゥール様式」との関係について調査する。

加えて、「円卓物語」の起源に関する議論を整理し、フランスにおける島嶼ケルト諸語地域への関心の高まりとその背景を明らかにするために、パボン神父の『プロヴァンス文学紀行』(1780年)やルグラン・ド・スィーの『トルバドゥール批判』(1781年)の読解を行いつつ、トルバドゥールとトルヴェールに関する論争の争点を整理し、19世紀前半に盛んに議論された「フランス語とフランス文学の起源」にまつわる問題がいかなる経緯で登場したかを検討する、そのうえで、ケイリウス侯『古代騎士道と古代ロマンス』(1813年)等を参照しつつ、なぜ優位にあったトルバドゥールの南仏起源説に対して、トルヴェールによる北方起源説が主張されるようになったのか、その理由と経緯を明らかにする。さらに北方起源説に有力な論拠を提供したラ・リュ神父の業績について、主著『中世アルモリカにおけるバルドの研究』(1815年)を中心に検討を加え、ロクフォールの『12世紀と13世紀のフランス詩』(1815年)や『マリー・ド・フランスの詩歌』(1820年)、フォリエルのソルボンヌにおける連続講演(1830-31年)等を読解しつつ、この「南北」論争の詳細を検討する。

2年目は、ヨーロッパ初のケルト学の国際的学術雑誌『ルヴュ・セルティック』の創刊までの過程とその学問的傾向を分析・整理し、この雑誌の野心と歴史的意義を明らかにする。またこの雑誌の編集上の中心人物であったアンリ・ゲドス、アンリ・ダルヴォア・ド・ジュバンヴィル、ジョゼフ・ロートらの著作等を読解・整理しつつ、同時代の中世文学研究者との関わりについても明らかにする。その際、パリにおけるケルト学者の交流の場となった「ケルト晩餐会」の詳細についても調べる。

3年目は、上記2年の調査を継続するほか、各研究対象に関する論文や学会発表等の準備を行う。

4. 研究成果

平成28年度の最初の研究課題は、18~19世紀におけるフランスにおける中世文学の復興に関して、文献等の調査によりその具体像をできる限り把握することであった。幸い上の研究方法に記した文献の読解や調査を予想以上に早く終えることができ、特に『ビプリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』については、それがいかなる読者層に受け入れられたか、また中世文学の復興とどのように結びついたのかという点に関して、かなり具体的な見通しを得ることができた。その成果の一部は「中世文学の再発見と「ケルト共同体」の創出」という論考にまとめて、日本ケルト学会の機関誌『ケルティック・フォーラム』に発表した。

続けて、平成29年度以降に予定されていたヨーロッパ最初のケルト学の専門雑誌『ルヴュ・セルティック』に関する研究を初年度に前倒しで行い、まずこの雑誌の最初の22巻を購入してその内容を調査する一方で、同雑誌の創刊者で初代編集長であったアンリ・ゲドスに関する調査にも着手した。

アンリ・ゲドスはフランスで初めてケルト学を学問として基礎づけようとした人だが、これまで本格的な研究の対象となったことはなく、その学問的・思想的背景に関して未知の部分が多い。したがって、手始めに彼のフォークロア関係の蔵書を「アンリ・ゲドス・フォークロア・コレクション」としてすべて所蔵する、米国インディアナ大学ブルーミントン校に約2週間滞在して同コレクションの調査を行った。コレクションはすべてマイクロフィッシュ化されており、全部で6749タイトルに上る膨大なものであるが、滞在中にそのうち1000タイトル程度をスキャンして、すべてPDF形式で保存することができた。短期の滞在でコレクションの全体像を把握することはもとより不可能だが、その輪郭についてはある程度イメージすることができるようになったのは幸いであった。同コレクションにはフォークロア関係で貴重な文献が多々あり、興味深いテーマを幾つか宿題として持ち帰った。今後の研究につなげたい。調査の成果は、2016年10月に行われた日本ケルト学会研究大会のシンポジウム「フォーラム・オン」において、「アンリ・ゲドスと『ルヴュ・セルティック』」と題して発表した。またこのコレクションについては、「アンリ・ゲドス・フォークロア・コレクションについて」と題して、同学会のNEWSLETTERに掲載した。

平成29度はまず、前年度に購入した22巻の『ルヴュ・セルティック』と米国インディアナ大学ブルーミントン校の「アンリ・ゲドス・フォークロア・コレクション」で収集した1000タイトルに及ぶ資料の調査に多くの時間を費やした。調査の結果、ヨーロッパで最初のケルト学の国際雑誌であった『ルヴュ・セルティック』には、当時の代表的なケルト研究者が積極的に寄稿しており、なかでもアンリ・ゲドスが編集長であった時代には、フォークロア研究の面で多くの成果があったことが確認された。この研究成果の一部は、静岡大学の森野聡子教授との共著論文「黎明期のケルト学」としてまとめ、2017年10月に発行された日本ケルト学会の機関誌『ケルティック・フォーラム』に発表した。

以上の作業をする過程で、19世紀のケルト学の興隆の背景として新たに浮かび上がってきた

のが、当時の民族誌や人種論の流行であった。とりわけケルト人種論は、ヨーロッパの中でもフランスで特に盛んに議論された事柄であり、詳細な研究を要するものと思われた。手始めに、パリ人類学会の中心人物であったポール・ブロカの人種論におけるケルト人種論を中心に検討し、また比較対象として、J.C. プリチャードら同時代のブリテンの学者たちの研究動向にも目を配った。その結果として明らかになったのが、19 世紀における「ケルト」は、「言語」と「人種」の両方の名称として広く認知された学問的对象であり、ケルト学はこのような知的状況を背景にして、はじめて大きく進展し得たことであった。この研究成果の一部は、平成 29 年 10 月に開催された日本ケルト学会研究大会のシンポジウム「フォーラム・オン」において、「ブルトン人種とは何か？」と題した口頭発表としてまとめた。

平成 30 年には、まず昨年度の日本ケルト学会研究大会において行った口頭発表の内容を「ポール・ブロカのケルト人種論」と題する論文にまとめ、日本ケルト学会 の機関誌『ケルティック・フォーラム』第 21 号に発表した。同誌にはまた、エルネスト・ルナンがケルト人種の精神的・気質的特徴をはじめて明確に言語化した論考「ケルト諸人種の詩歌」の前半部分を翻訳し、詳細な注および解説を付して掲載した。また、この翻訳の一部を使用して、ブルターニュの民謡と奄美民謡の共通性を論じた「鹿児島島の奄美、ブルターニュの奄美」という論文を、編著書である『島の声、島の歌』に発表した。

10 月には、富山大学で開催された第 38 回日本ケルト学会研究大会において、ブルトン語とブルトン語文学を専門とするブルターニュ・オキシダント大学教授のロナン・カルヴェス氏を招待し、「18 世紀のブルターニュの貴族はブルトン語でどのような文学を書いていたのか？」および「声から文字へ ブルトン語の口承文学」というタイトルで 2 回の講演会を開催し、それぞれの講演で通訳および解説を務めた。同氏からはまた、本研究課題に関する多くの有益な指導・助言を得た。同研究大会ではさらに、「ケルト人ラフカディオ・ハーン？」というタイトルで、日本において当然視されているハーンとケルトとの関係を実証的に問い直すシンポジウムを企画し、パネリストの一人として「ラフカディオ・ハーンと『ケルト幻想』」と題する報告を行った。

また 11 月には渡仏して、レンヌ大学等において文献やインタビュー調査を行う一方、カンペールの欧亜高等管理学院（EMBA-ISUGA）において、約 200 人の学生・教員を聴衆として、ラフカディオ・ハーンを受容を中心として日本とケルトの関係を論じた「ケルト的日本」と題する講演を行い、本研究課題の成果の一部を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

梁川英俊、鹿児島島の奄美、ブルターニュの奄美、南太平洋海域調査研究報告 No.60、頁 1~18、2019 年 3 月、査読無

梁川英俊、カンペール今昔、日本ケルト学会「NEWSLTTER」Vol.25N.3、頁 4~5、2018 年 12 月、査読無

梁川英俊、ハローウィンはもともととはどんな行事？ 南日本新聞 27567 号、頁 15、2018 年 10 月、査読有

梁川英俊、ポール・ブロカのケルト人種論について、『ケルティック・フォーラム』第 21 号、頁 17~22、2018 年 10 月、査読有

エルネスト・ルナン、梁川英俊、ケルト諸人種の詩歌について(1)、『ケルティック・フォーラム』第 21 号、頁 35~45、2018 年 10 月、査読有

梁川英俊、森野聡子、黎明期のケルト学、『ケルティック・フォーラム』第 20 号、頁 5~16、2017 年 10 月、査読有

梁川英俊、クローデット・エリアスさんのこと、日本ケルト学会「NEWSLTTER」Vol.25N.1、頁 3~4、2018 年 3 月、査読無

梁川英俊、中世文学の再発見と「ケルト共同体」の創出、『ケルティック・フォーラム』第 19 号、頁 33~34、2016 年 10 月、査読無

梁川英俊、インディアナ大学の「アンリ・ゲドス・フォークロア・コレクション」について、日本ケルト学会「NEWSLTTER」Vol.23N.2、頁 5~6、2016 年 12 月、査読無

〔学会発表〕(計 8 件)

梁川英俊、Le Japopn celtique、招待講演、2018 年 11 月、欧亜高等管理学院（EMBA-ISUGA）（フランス・カンペール）

梁川英俊、ラフカディオ・ハーンと「ケルト幻想」、日本ケルト学会研究大会、2018 年 10 月、富山大学人文学部（富山県・富山市）

ロナン・カルヴェス、梁川英俊、声から文字へ ブルトン語の口承文学、日本ケルト学会研究大会、2018 年 10 月、富山大学人文学部（富山県・富山市）

ロナン・カルヴェス、梁川英俊、18 世紀のブルターニュの貴族はどのような文学を書いていたのか？、招待講演、2018 年 10 月、富山大学人文学部（富山県・富山市）

梁川英俊、ケルト人とは誰か？ ケルト語とは何か？、日本ケルト学会東京研究会、国内会議、2018 年 3 月、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都）

梁川英俊、鹿児島島の奄美、ブルターニュの奄美、鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジ

ウム「島の声、島の歌」, 2017 年 11 月、AiAi ひろば 2F ホール（鹿児島県・奄美市）
梁川英俊、ブルトン人種とは何か？、日本ケルト学会研究大会、国内会議、2017 年 10 月、
慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県・横浜市）
梁川英俊、アンリ・ゲドスと『ルヴュ・セルティック』、日本ケルト学会研究大会、国内会議、
2016 年 10 月、静岡県立大学（静岡県・静岡市）

〔図書〕(計 2 件)

梁川英俊編、島の声、島の歌、南太平洋海域調査研究報告 No.60、2019 年 3 月

木村正俊、松村賢一編、ケルト文化事典、東京堂出版、2017 年 5 月

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。